57X
51
7

訓幼字義

卷三

仁

仁義禮智

訓幼字義巻之三

仁 凡 條

仁とゐ、苦悲はぢろく物
及ひて門外をいろりてをのをを万を
おきをふするもの自ゐさ
の担指人の注更さるる
ものかり経さ仁とゐ人あも
も事を人ををもるの活ちりてを
とゐをかし悉日人苦有所忘
遠それ其一死思仁也又只明陽之心

仁之端也と見
字三川し今自
人心は海の如
仁みてるの二字
の教み為て一
ら生あり

●聖賢のさよ仁
仁者天下し安
仁を行ふ為
ムこのめまかなら

とこうのさいとを
ら生をかさってと
これをあをとをか
克己復礼為仁
のつよ為自ある
をねし主
其二在且仁
仁五郎主
仁の効験

端也と云ふ仁を根から
得ても云ふ根を語るを捉く
のも仁をとるの法吾人の道とする
ゆくのもの
●後を仁の根本
天下を正理又曰公而以人体之故曰仁
孝延平曰当理而無私心仁也又覚
と判しを人
をとして知として
(韓退之曰博愛之謂仁)
程子曰仁者

研究すること二三年来毎晩と
りてを又名を判し一生を判する根
切を学ぶとして心の徳を
とらえて仁の字を
正てこの根元活用をとて和を
ずとそ不ら根本の根切
書面あれとも仁を人の性と昌
ら理をとて云
てもの

●韓文公原道ニ博愛之謂仁ト
云ヒ又ハ行テ
陰ニ心仁也後

仁と
の事にて 神武の
天皇の御心もそくみおはしまし
まはを仁を以とそうらふのかたち
●當理而無私曲
皆ま而て 神武
それか式ふけ
みあそばされ
御心又そうそ
理みそうそ

●張世拍拭く仁者覚也と又謝上茶も
覚を以て仁我拭くが如き拍也もてる
禅宗を学ぶ人みな行脚
こゝろあるべきの事
を上参ぬ禅門の言ひ
阿て南泉信具師況而
漢手而仰とその人みな子孫の拍
玉茗園なし生

仁の事ゆふ清き茗ものを混
合て茗別なし禅門のそく
禅宗ともれを利益のよう
そもそも茗而を設ぬかれ
ともえい仁てそれを拍
いつくまでも茗而と関係
のそ仁を拍ふくと仁拍
ふの茗別なきを拍ともい言葉

●又公羊以仁許人之說有
是事理不可將公使喚做
仁公而以人休之理不可
的曰公是仁之理不可
仁公而以人休之理不可
公者以下當時公之吟詠
人者之之事之仁者之
也者仁者之事之仁者
仁者之事之仁者之事

●又人を以て刑すれば非ざるもまた非ざるなり故に仁者人也とあり古
もまた市有ればあまねく仁者人也とあり古
もの字のごとく人の旁を以て二の字を書
て其下に小の字を書ときは仁の字となる
人の生死をかかわりて人の字を

●程子曰満腔子是惻隠之心と腔子是惻隠之心と腔子是惻隠之心と

理あるを信ぜんとするが如き是れ又此可愛仁を失のみならず小人の物生理を悪具又云和を嫉底便を云当るを叶飲啄自如未有不亦害也とのごとく動静のかゝわりを知ざるを以てにをもとめてもとめうるを以てもの理を見る事能ざるの類皆是仁を生ずる所以の者を以てこれを●論語集注云仁者愛之理心之徳也仁者愛之理心之徳也子曰仁者心之徳愛之理と云の二句おなじ意なるべし

張しあり畢竟初学の者の為にせんえこの章の理を注しまをいたしたるものなるべし

心之德之用是以曰仁人之
心也以天地萬物爲一體
仁者見天地萬物之體
物而不遺與物無對一
以貫之萬物皆備於我
反身而誠樂莫大焉强
恕而行求仁莫近焉
孟子曰仁也者人也合
而言之道也
程子曰仁者渾然與物同體義
禮智信皆仁也
又曰仁者其心公而
理也義者其
事宜也
又曰仁者天下之正理
義者天下之
定制
又曰仁者人心也義者
人路也
又曰仁義禮智信
五者一理仁
包四德而言之
則仁之一字
足以該之
又曰仁者
其心純乎
天理之謂
又曰仁者
心之德
又曰仁者
愛之理
又曰仁者
天地生物
之心而人
得以生者
也故人之
有生莫不
賦此生理
以爲心
又曰仁者
生之性
又曰仁者
生之道
又曰仁者
生之理
又曰仁者
生之質
又曰仁者
生之用
又曰仁者
生之德
又曰仁者
生之本
又曰仁者
生之根
又曰仁者
生之源
又曰仁者
生之機
又曰仁者
生之脈
又曰仁者
生之氣
又曰仁者
生之意
又曰仁者
生之象
又曰仁者
生之形
又曰仁者
生之容
又曰仁者
生之貌
又曰仁者
生之色
又曰仁者
生之聲
又曰仁者
生之香
又曰仁者
生之味
又曰仁者
生之觸
又曰仁者
生之法
又曰仁者
生之界
又曰仁者
生之處
又曰仁者
生之時
又曰仁者
生之空
又曰仁者
生之識
又曰仁者
生之行
又曰仁者
生之果
又曰仁者
生之報
又曰仁者
生之緣
又曰仁者
生之因
又曰仁者
生之業
又曰仁者
生之道
又曰仁者
生之理
又曰仁者
生之性
又曰仁者
生之命
又曰仁者
生之天
又曰仁者
生之地
又曰仁者
生之人
又曰仁者
生之物
又曰仁者
生之萬
又曰仁者
生之一
又曰仁者
生之二
又曰仁者
生之三
又曰仁者
生之四
又曰仁者
生之五
又曰仁者
生之六
又曰仁者
生之七
又曰仁者
生之八
又曰仁者
生之九
又曰仁者
生之十
又曰仁者
生之百
又曰仁者
生之千
又曰仁者
生之萬
又曰仁者
生之億
又曰仁者
生之兆
又曰仁者
生之京
又曰仁者
生之垓
又曰仁者
生之秭
又曰仁者
生之穰
又曰仁者
生之溝
又曰仁者
生之澗
又曰仁者
生之正
又曰仁者
生之載
又曰仁者
生之極
又曰仁者
生之恒
又曰仁者
生之河
又曰仁者
生之沙
又曰仁者
生之無
又曰仁者
生之量
又曰仁者
生之數
又曰仁者
生之法
又曰仁者
生之界
又曰仁者
生之處
又曰仁者
生之時
又曰仁者
生之空
又曰仁者
生之識
又曰仁者
生之行
又曰仁者
生之果
又曰仁者
生之報
又曰仁者
生之緣
又曰仁者
生之因
又曰仁者
生之業
又曰仁者
生之道
又曰仁者
生之理
又曰仁者
生之性
又曰仁者
生之命
又曰仁者
生之天
又曰仁者
生之地
又曰仁者
生之人
又曰仁者
生之物
又曰仁者
生之萬
又曰仁者
生之一
又曰仁者
生之二
又曰仁者
生之三
又曰仁者
生之四
又曰仁者
生之五
又曰仁者
生之六
又曰仁者
生之七
又曰仁者
生之八
又曰仁者
生之九
又曰仁者
生之十
又曰仁者
生之百
又曰仁者
生之千
又曰仁者
生之萬
又曰仁者
生之億
又曰仁者
生之兆
又曰仁者
生之京
又曰仁者
生之垓
又曰仁者
生之秭
又曰仁者
生之穰
又曰仁者
生之溝
又曰仁者
生之澗
又曰仁者
生之正
又曰仁者
生之載
又曰仁者
生之極
又曰仁者
生之恒
又曰仁者
生之河
又曰仁者
生之沙
又曰仁者
生之無
又曰仁者
生之量
又曰仁者
生之數

書し理と云ふもの
仁を人心の生
言
物生ずるもの
生ずるまでもの
を心の体云に
ともの
理なかるべからず
ふ
ふ
ふ

行之内のかの根本これを根本と
謂これを生ずるものこれを道と
謂とき孝弟をもって仁の
根をなすとなしてよりて
孝弟の仁の根本たるの
事実を挙げ
其れ
と
孝弟の仁の根本たるの
理由を説明せられたるもの
なり
先儒の孔子為仁
孝弟為本論性則以仁為孝弟之本

又曰孝弟是仁之一事謂之行仁之本則不可

もの、性も孝弟より性の用ての名なり
孝弟を仁のもとゝするときは仁を孝弟
よりうまれきたるやうにきこゆるの
ときは仁と孝弟と二人ゝなる考弟

はくしてそのよるべきなひなし
ふのみちあり二ハ孝弟これ孝弟の仁をもとめ
をもとめこれを先倫の仁をもとめ
仁をのみもとめるいうをもとめ
のごとく抜すぶる十のも仁の
あるふあるにあらずんば事をなすを根本の
事あり本ありて末あり仁をてゝのをもとも
孝弟仁の根ありてそこより仁を
孝弟より仁を求むる

迴ら先為を仁とそれをかゆ
事を仁のかくしてこれをよろ
仁とりまい事をしてものをするをも
おなり事ら云事を是多人也
とるい事をまする事をもつ
みるものをよりしるのをみ
まて云多郎な事を仁をもつ
事をれ仁事をれ
ろ仁の郎をもたるとも
ならく

ぼんやり仁ら事の二句仁のをること
よもの事仁おこるものありとい
ふ仁かきてみ
郎ろ之郎をみ
●論語ら人而不仁如礼何人而不仁
如楽何とゆう仁てなり仁ての当事の他
礼ら礼仁事ら事の当事の他あるをと人ものも
当事の他をそそる礼事をそ
りものしてい礼事をめてそ

（三）
孟子の説分明なり　淮氏の説も
孔子の意なり　孔子の仁
人而不仁則人理失正　理則無序
仁者天下之正理　此の仁
而不和することなし　この仁を
ずる　孟子の説をうし
ろで　孟子の説をうし
おもひおもひ

をみる仁しも芸者の仁みあれ葉
も 雅者も高
程を仁をゝ争あるをゝ
をゝ大よ
(をゝの
手をの叩のをゝ
なゝれみあれ
のをゝんをゝ
●顔よの仁を同
石仁をあゝ

を捉ゝ己とゝ
ふ元人ゝゝ
事のゝゝして
羽毛刻
ゝく人を一枚
をゝをゝもの
弓勾の一つ
明てゝの人を
ままゝ人の

礼不解を以てこれを治むるを水
禮を人敬を利すると為すものは
ものなり畢竟
道とこれを礼を
とこれ先儒仁を人を得るを
これまでして私欲をさりてあ
立かつもの
てのことさらに
○夫子顔淵を称して曰田也其心三月

不違仁とは仁者心之徳心
不違仁者無私欲而有其徳也程子曰
不違仁只是無私欲纔毫私欲生便是不仁
日月至焉とは仁者のことをおもふに
其ものゝ
り無きところのもれるより出てその
人生一私をまじへざるをいふ
まことにして

甚心不遠仏とそ
す
てをこころよく
のまま
引
ろ
ま
ま
号
仏
ま
ま
ま

而不敢加焉言若有所思而不易
世次之序也故有所思而不易
之上之言也故曰
○樊遲仁者
子曰愛人仁者心存
於愛人

忠即恕体恕即思也
已矣

新安陳氏曰此与仲弓（何仁章）問仁章同
以敬恕言此以恭敬主言蓋居処恭動静
時敬也執事敬動時敬也動静恭敬表
裡出処一以貫之能持己敬而無伐善
所居而仁豈外是乎己所不欲勿施於人
人亦然己欲達而達人亦然己所不欲
勿施於人人亦然不待勉強而自然
無適而不仁也程子之学大抵如此
学者須是体認天理於日用之間随事
随物各得其宜則此心之仁無所不在
矣

此是徹上徹下語聖人動容二張也
以下皆同若論其極則聖人之
心有所不盡焉
程子曰己所不欲勿施於人在
己者既無怨在人者亦無怨
横渠張子曰己所不欲勿施於
人施於人者己必反受之
謝氏曰己所不欲勿施於人
雖聖人不能使物無我
尹氏曰己所不欲勿施於人
以己之所欲而施於人
則己之所不欲者
又安能使人
之不施於己
乎

巧言令色鮮矣仁と云則敬本訓迅
速仁なるものゝ仁愛の事よりあはれ
みやさしきまことの仁を云ふ其人へ仁を云
事を直ち仁の人なりとのみ云ふ
てもあり仁愛ふかくてのみ
ありかつ言やさしくうるはしく
ていつてもかならず仁愛あるとは
云ふまじこれ

外柔にて言語をたらくとして
人をたらすものゝ事をいふ
巧言物言利口
こうし人を言
これまでの例物を言ふ（假）
便佞
佞てこく人を
をゝみよりてこびへつらひ
到敬本訓の人へ
物つゝしみ

子路曰有ようへ
な管仲よゆるし多まえまおて
ま管仲ようゆるしみまとう
自しえ先聞のこと
ま桓公の仁のお仏を
の後聖よりまえまおやまえまおる
ま管仲の仁のとうを
而甚利澤及人則有仁之印えス
汚云仲之仁是粗処至精処則顔子

ままてをとる
関士気夫の問まて整のとき戸えス
陳みおし生活をやまおて不知甚
とのおまえまお一時のあれとも仁ふ
みの管仲の事をおもの後のも
甚不仁をこおかんそふえふふく
甚仁をゆまて仁ことのまお
この石乗濳海多をてて仏り

三月之後言遠之至
矣而仁在其中二矣有心術之為言者
非大賢以上之
安仁不足當
新安陳氏曰仁者心德之全體
右心事功之頭若言者其
見之小而實之大有
之而不知其所以然
之而不見其所以
之而不知其所以然
之而不見其所以
之而不知其所以然
之而不見其所以

●至聖の孝行
これ等をよく考へ
へ此ところあり
以成仁といつて
有三仁といつて
有るの義
孟子曰
下がかゞあり

ほのを乃人のまも
ふへまる
市朝も油よりも
との多語の
言葉をもつて
まるまで
對もそうこと
すれ分も
若者のこころ

●或の云 猪を字に仁の事を詠て云

芦垣こ徳

とうろうそそ星そのいんやっ筆者と

そとはをて一言人仁とのあるみ

らるよとみそうそもそほをの

るるかいみのの仁仁私

私そくさつぬえはもやま

みそそかこをはる与よ

あそ哀砂筆あんやて平を

●或の云ふ君子死世仁者礼者根
本をいふ礼者仁者其の外の物
をもあれこれかふかうといふ
ことを云ふ仁者礼者其の物
をいふ礼者仁者其の物を
云ひ礼者其の礼楽のことを
云ひ仁者礼者其の物を
云ひ仁者礼者其の物を
云ひ仁者礼者其の物を
云ひ仁者礼者其の物を

ものう仁象もはるくへ
の物よあるよみ
てもあるて七旦多逃きてを吹て
まて玉をあつ
羽みて天は自然の言多竹肉の
声を出すを人の声
洁濁をまぬかれまほとうて
陰陽移れしてを
をまをまと云ことわの号をものの人の

声のあるを思うものみをまを羽多
て生自然よ作てあるを人のこの言不
羽まうまのあるを仁んまあく
のてくく仁てんのみうれみを
みて仁の作てあるものの二て妙者多
号おの作うあうて仁ねまる
叶てて言のの人工のほうまをてこと
をものあるまて仁てこのうけを
言ゆみをしまとうとも

仁義禮智

●伝義礼智の四つ、孟子始めてとなえ出だせしものにて、四つのものの外にもまだあるべきなれども、まず人の生まれて生を営むに、是非なくてはならぬものを取りて、これを四つの名目に立てたるなり。

●孟子の時代の諸侯の治国平天下の論、皆功利の説にて、義理の説なきゆえ、孟子これを正さんがために、仁義礼智の説を唱えたるなり。

●好学論より三五性真

当向仁義礼智信と云ふ五ツの
ことを人々 性の名ことへ
至人のことを
韓退之の
其の等質の
備のてく
てかり
●先儒の説
理あり

人ニ於ケル仁義礼智ノ性ハ
とかゝる等を
序云至自天降生民則 欠不手
ニ於ケル性ハ学 即チ元亨
利貞天道ニ
立綱ニ
海ニ
ハ

…ふ言ひかよ…
●夏仁義礼智信のうちの
人の性うまれつきの他の事ニ而
…かゝりましてとうもうまく
のことゝ…
浮雲多ニ而…
…ふ而…
信義とある…

而ニ言ふ又仁義忠信とあり仁義
礼智楽ニ…
直門義此方外とあり易の系辞ニ
ニ云。君子義以為質
とあり周礼ニ…
此外仁ニ而…
てお内ニ…
ニ和と…

あげつらう武将の智仁勇
仁義のみを尚ぶす至当
みてとおもふ武将の方おかくみてく
ニ居もそうまつりの門仁
勇おもと云ふかきおよりおもかいこれさう
てもつまつはをまもしこれを守備
仁勇れ古人の言ふ具とも云ふ性み
備うる五つの外ふあるこ

●仁義礼智信を叫て五常とふを
ハよき筆ふ有ふ前漢の甘野延寿
ものてこへ抑も生は言ふ又いう
古注を考ふるのありて所当
ものかりの朱よの古注国家よて
注疏五常を作物五
わこ所当しるも乃かりこの秩
古書室内の
ぼうてうの寿
已な

[illegible]
家の門よりていたりて未だ其の在るを見ざるもの
[illegible]
曰孔　曰信　曰仁　曰義　曰礼
[illegible]
[illegible]
[illegible]

罪時汁事のあるてくれよこおろ
て仁多礼をて 忠 称まるあるも
事 忠信紛信の 信とへ参列おな
ひもて性理字 中信 信書
云信心心を言 忠信し信
以言を實而言 忠信言もなりもれも
お言をの二ん まるも
信心おまのれ 考ろま言高信
まれのれてのんもも

ちる心まるを 信と 実忠の内
一向も仁多礼 の実理を信と
なをなし 仁多 実のおり をて
仁多 私をと あれ 自実性ろ
信を以て 心めを重性さんお
或の仁をかして 向てろる 假仁を
包而仁を云 をみて向てろる
等到礼と云中 信を以て、

龍表

而して
●孝経に曰く、仁者は人を愛す、
孔傳に曰く、仁は信なり、
禮記に曰く、信は義の本なり、程朱の説
とを合せ考ふるに、信の仁を云ふ所以
の信なるものの、揚子法言に
仁也、義也、禮也、智也、信也、
とあるの信の字の如く、其の
仁義禮智の四つの德を
一つに統べ
也な守曰く、信とは、

其の言の必ず約束を踐むを云ふ、
是れ普通一般の信の義理とする所なれども、
宇朝鮮等の注解大抵初學の學ぶ
所の三代實錄の如きこのかさかりのもと
なれども、誤謬の多かれあれいなを
ともあらを、なをもて知るべし
為の功甚偉なり、
く當為あらて三代實錄

十分まて出ことの
ゆるさ[illegible]
の活像の中に
程まて来ず修業
修行をつみ信を
ひとりをも
ゆるの活像を
をはかり一論
を出すを一論
を出すを無

●孔子常ふ仁者ら称みつ者仁者と
のあまりて仁者ともあるとせて
てかし…ふよ中ふ…ふ…ふ…

毎列を立てもんもあるかも

●義と舎取捨進退生死浮朱の上より觀て可不可の差あるかを考て能わ上の差あるかり多分人皆捨所不為迄もお其事能為也又曰羞悪之心義之端也とあり此等のてもみ因て主義を叶と云ふ朱子曰義者心之制事之宜也と是等を

成德の上よりて是非を立仁者安仁智者利仁とこれなど立仁者あれい凡人なる者のそ故曰五人とも迄曰仁と等又曰若仁由ふ事ふ仁ふ人ふ仁ふ有心以礼存心とてもし見るよ新し立捨以仁

今の性えう我が
心を到するのそ
倫制の性なり
●義我事を宣也
原の義者宜也
かを得我也
もこの分もつ
同方のうを

例毎年をつり
物ものもの一面ての
つくうるあ
玉ふ征者正也
道自道也又
得也とうの
身をこするの
をゆうんとあ
ふのうを

也言乃ていおそろしてあるを忘れ
とあるもその色をかへ
●仁あまねく義ゆきわたり智重き重寶
の授よ御う義あ[illegible]ありて仁なきと智
物を有ふの技みを備るなき[illegible]の
為に仁義の二つのものもあらせ
一個の拳かし[illegible]一生まつるて
とあるとき大あやまちを打ち
射る者を[illegible]不仁なるゆゑ
自害をせ[illegible]
ふ義なり[illegible]事の上をおもひ
るべし[illegible]これを大
日まてなり[illegible]
打れて一個のこと
●至誠の主よ仁義の
玉手箱よ報恩の中

物ニ於テ未タ之有ラス果シテ
ニテ事ヲ事トシ取テ人ヲ以テ
内トシ人ヲ以テ人ヲ外トシ
ニ仁内ヲ以テ義ヲ作シ仁義
ヲ以テ義外ヲ以テ義ヲ作シ
ノ如キ初テ之ヲ聞ク 孟子
子浮外ノ本内ニ在リ義ノ内
ニ外ヲ以テ義ヲ作シ仁義
ヲ以テ義外ヲ以テ義ヲ作シ
ノ如キ初テ之ヲ聞ク 孟子

甲ヲ以テ乙ヲ例シ乙ヲ以テ甲ヲ例シ互ニ相ヲ
待テ以テ仁内義外ヲ
ヲ以テ義外ヲ以テ義ヲ作シ
ノ如キ初テ之ヲ聞ク 孟子
子浮外ノ本内ニ在リ義ノ内
ニ外ヲ以テ義ヲ作シ仁義
ヲ以テ義外ヲ以テ義ヲ作シ
ノ如キ初テ之ヲ聞ク 孟子

何ソ記仁内義外ノ
ヲ以テ義外ヲ以テ義ヲ作シ
ノ如キ初テ之ヲ聞ク 孟子
子浮外ノ本内ニ在リ義ノ内
ニ外ヲ以テ義ヲ作シ仁義
ヲ以テ義外ヲ以テ義ヲ作シ
ノ如キ初テ之ヲ聞ク 孟子

是ヲ以テ我カ悦ヲ故ニ
吾ヲ長スル是ヲ以テ長ヲ

無異おもふ所文牧写ふ事
この事いまだ弟に告ざるゆえ
善一人の弟に告ざるゆえ
ちすでに弟に告ざるゆえ
つまるものの事を文にもの事弟
の足長右をうわまわっている兄伯
牧そ人の兄伯牧みて告まり
年まうけまいれ仁和寺と
長をもをするの告弟よつまをして

先まあるの事これまでの事をみ
ぬて仁和寺の事をみて
はおあるの事ニの事
●告子内外を捉よ海する色み
そのて善おとまをして仁和寺と
仁の角と出てをまて
そうこれまでの仁和寺と

●大抵孔子の仁義を説くや多
くは門人の請に応じて
其の人に適するの説を
なすが故に門人各
其の聞く所を記して
其の人を知るに
足る

●仁は人也義は宜也仁
義は人の宜しく行ふ
べき道なり

世を厭ひまでの考へつかまつりもてゆくほどもなくこれを弁もしかねる程をおの家を牡ふとあたとすかねる義とある事なる旦那寺を度外するをそのうちつゐにはまかてとなりぬ

●禮とは大にしても小にしても冠婚喪祭の別ありて冠衣服の如し小にして

張を退のみくの次第あるをまて
其間礼節二ある文武同じてを落
のみうお同じ礼を失ふ而
のみうを失て後礼を生じ
のみう後まいとも礼を
この事のを落を配なさんつぶよう
礼を配してにて
皆を配して人の
皆配なあやまり

●論者多往々礼者天理之節文人事之儀則也（ママ）
（ママ）
（ママ）

如礼何との為す程のものか古岡雖
雖

解趾とを後下り用官法なと
このものをもこのみて
をくのやうくに礼の為の士のと
お作かしてもあいふうまをもいれよ
大抵衛路のんなるを白
て多く雷もの
まりくして来作法式
作礼のるまをまの

こころ多きをもて　なほこれをりよ
てもてなすをもてよしとす　あまねくあまねく
予故洞有仁而無礼則従容而無
節石礼而無仁則僵格而不親と
いへるの今ことばにかんがへてこころ
●畢竟礼とはものゝ仁義を節み
もちゐるの作法あらはしてその
作物あらはしてその両の道をいふ

社をこれをひきいる節一
中庸にまの
二の章仁の條を載うてそれをさす
再
而己をあらすこれをおさめよ語孟ともおなじ
礼義の字をもの字
かみをもちゐてこれをおさめ人の作の跡をしてへ
●一言のおもてにあらはれて礼義をおこなふ
の規矩準縄をもちゐるごとし

みち等てのみちまもりて多しほとんど義路也
禮門也君子由此出斯道也とあり
又進以禮退以義とありてこれも
信と義とをそのまもりてそのまもり
ときてみれども礼にまよかかるさまよ
まもしかるをまよ右お曰信近於義言可復也恭近於礼遠恥辱也因不失親
亦一可宗也とてこのとけい信も

今お案ておもきみまもりて義今ま
等てもまもりておもきみまもりてもまもりて行ときてもまもりて
ときて

礼をきやうのてたも
あこ汚りもつかーあ礼をふる
そそそ叮きとき人作りうのよみ
和をあつてそーひ白きくい
りとくそもむ白きとなりスまよ
の口基向無礼勿論勇而無礼
工芸士口大人右言不忘信行不忘黒作
主務と所在といてう早ロきよ

卅日をおる等のよ礼をれて
のをもそもみ
せをもそのをもそて作れ忘ろ性
よろろえりぶをも
ちもの一つみも
さ所白しも
○得禮をいはも世を活浄はも
ちもすれもおまも得を和
のなる和をれ白をれのてく

軟ともまた異なり、先儒の分別は小座理と
復り且は性
[illegible]
多かりてつひに
口仁義礼智の三つのものを乃至その
ごとくいふ人のごとき者にして
人みなかくのごとくいふを

先師とす故に其学
問物言等の
あれば論語中庸
孝経同而好
取人以為善と
云ふ事を
これの
なほもとをいてこれ
主人の
口授をうるのてを
ものもまた
分をてありて
元人の
てこれを
弘法大師の
を

CL57X
附51
No 7